

詩篇91篇

《私の避け所》

- 1 いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。
- 2 私は【主】に申し上げよう。「わが避け所、わがとりで、私の信頼するわが神」と。

《あなたの避け所》

- 3 主は狩人のわなから、恐ろしい疫病から、あなたを救い出されるからである。
- 4 主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。主の真実は、大盾であり、とりでである。
- 5 あなたは夜の恐怖も恐れず、昼に飛び来る矢も恐れない。
- 6 また、暗やみに歩き回る疫病も、真昼に荒らす滅びをも。
- 7 千人が、あなたのかたわらに、万人が、あなたの右手に倒れても、それはあなたには、近づかない。
- 8 あなたはただ、それを目にし、悪者への報いを見るだけである。
- 9 それはあなたが私の避け所である【主】を、いと高き方を、あなたの住まいとしたからである。
- 10 わざわいは、あなたにふりかからず、えやみも、あなたの天幕に近づかない。
- 11 まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。
- 12 彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする。
- 13 あなたは、獅子とコブラとを踏みつけ、若獅子と蛇とを踏みにじろう。

《神の守り》

- 14 彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。
- 15 彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。
- 16 わたしは、彼を長いいのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう。

詩篇「第四巻」冒頭の90～92篇を「三部作」として理解しながら学びを進めております。

90篇……空しき人生の直中におられる神	〔捕囚中期〕
91篇……危険から守ってくださる神	〔捕囚末期〕
92篇……礼拝において神に仕える喜び	〔帰還後〕

本篇が書かれた時期が捕囚末期だとすると、詩人は50年以上に及ぶ拘束からついに解放される日が目前に迫ってきて、これまでの歩みの中に常に神の守りがあったことを振り返っていると読めるでしょう。全体として一貫しているテーマは「危険からの守り」ですが、使われている人称代名詞に着目することで理解を深めることができます。

- ①一人称（１～２節） 「私」
- ②二人称（３～１３節） 「あなた」
- ③三人称（１４～１６節） 「彼」

①一人称（１～２節） 「私」

まず１～２節では、神に対して「わが避け所」「わがとりで」「私の信頼するわが神」と呼ばれています。極めて個人的な神と詩人の関係が浮かび上がってきます。詩人は神を「隠れ場」「陰」という隠喩で表してもいますが、おそらくここには「大鷲の翼」のイメージがあり、雛鳥がその下に隠れて守られている様子を描いているのでしょう。捕囚という過酷な現実の中にあっても（捕囚民には祖国への帰還の希望はまったく見えなかった）、目に見えない神を常にそのように思い描いていたのです。

主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。

②二人称（３～１３節） 「あなた」

３～１３節では、詩人が語りかける対象が「あなた」に変わります。まだ信仰を持って間もない人を励ます言葉なのか、それとも自分自身を二人称化して呼んでいるのか、あるいはイスラエルの民全体への語りかけなのか。いずれにせよ、ここでは地上で生きるうえで直面する様々な危険とそこからの守りが、多種多様な表現を用いて伝えられています。

(1) 危険

「狩人のわな」「恐ろしい疫病」（３節）

「夜の恐怖」「昼に飛び来る矢」（５節）

「暗闇に歩き回る疫病」「真昼に荒らす滅び」（６節）

「わざわざ」「えやみ」（１０節）

「獅子とコブラ」「若獅子と蛇」（１３節）

これらの比喩表現が具体的に何を表しているのかは定かではありませんが、例えば「わな」というのは何らかの敵が仕掛けてくる策略を指しているでしょう。「罨」というものは、簡単に見破れるようには作られていません。呑気に歩いていると突然足を取られてしまう類のものです。特に、健康面、経済面において人は狙われやすい。医療が逆に仇になることもあれば、法外な金額を請求されたりすることもあるでしょう。悪人は昼夜を問わず獲物を探し求めています。「蛇」の類は「邪悪な権力」を象徴しており、それが「獅子」のように力と攻撃性をもって襲いかかってくることを言い表しているようです。また、「疫病」のようにひたひたと忍び寄るものもあります。「この世」はサバンナであり、常にアンテナを張り巡らして生きていなくてはなりません。

(2) 守り

「いと高き方の隠れ場」「全能者の陰」(1 節)
 「避け所」「とりで」「私の信頼するわが神」(2 節)
 「ご自分の羽」「翼の下」「大盾」(4 節)
 「避け所」「住まい」(9 節)
 「御使い」(11 節)
 「助け出そう」(14 節)
 「救い」「誉れを与えよう」(15 節)
 「長いいのち」「救い」(16 節)

神は確かにおられる、自分を守ってくださっていると信じることはできるかもしれませんが、しかし、そこには根拠が必要です。信じがたい奇跡を体験する人もいるかもしれませんが、すべての人に共通して及ぶものとは言い切れません。実際、人生には病も苦しみも付き物であり、時には迫害を経験しなくてはならないこともあります。この詩人はまさにバビロン捕囚で苦しんできたのです。

では、信仰者は何をもって神の守りを信じているのでしょうか。それは偏に、神の性質への信頼と言えらると思います。神がどういうお方であるかを知っているがゆえに、そのご性質ゆえに信じる者に必ず良い結果をもたらしてくださると信じているのです。神の性質を並べてみると、真実、善、正義、愛、恵み、慈しみ、憐れみ、全知、全能、永遠、不変、偏在など、人がどんなに人間に対して求めても得られない要素に満ちていることが分かります。その他の表現としても、契約を一方的に守る方、ご自身の約束に真実なる方、孤児ややもめの友なる方など、聖書には実に多くの神の聖き性質が散りばめられています。詩人はそのような方を自分の神として持っているものであり、だからこそこの方を「**避け所**」「**大盾**」「**救い**」と呼び得たのです。この根本的に善いお方には「すべてのことを働かせて益とする」(ローマ8:28) ことがおできになります。

③三人称 (14～16節) 「彼」

14～16節では、ご自身に信頼する者への神からの保証が語られています。ここでは人称代名詞は三人称になっており、神が信仰者の祈りを聞いて動き出そうとしておられる様子が生き生きと伝えられています。「わたしは彼を助け出そう」「わたしは彼を高く上げよう」(14節)、「わたしは、**彼に答えよう**」「わたしは苦しみのときに彼とともにいて、**彼を救い彼に誉れを与えよう**」(15節)、「わたしは、**彼を長いいのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう**」(16節) と、もったいないほどの約束で覆われます。

実は、詩篇91篇からのメッセージは神学生時代に課題で作成したことがあり、本当はその原稿を紹介したいと思っていました。しかし、残念ながらそのデータは失われていたため、一から作り直しました。15年前とは「別物」が出来上がりましたが、この期間に経験してきた様々な試練や守りの経験を通して、この御言葉の真実を学びました。神がどういうお方であるかを知ることこそ、私たちの信頼そのものとなるのです。